

期間： 2006 年～2012 年、（宮城 啓、氏家無限）

ラオスにおける巡回診療—その2.（宮城 啓）

関西医科大学公衆衛生学教室が主催し、今年で 8 年目となったラオスの僻地における巡回診療は 3 月 13 日から 3 月 17 日まで行われた。熱研内科も本活動に 2007 年より参加している。ラオスは他の最貧国と同様、都市部と僻地における貧富の差が著しい。都市部の富裕層はメコン川対岸のタイの病院を受診するが、僻地の住民はレントゲン検査や血液検査が可能な県病院を受診することさえほぼ不可能な状況である。僻地の住民にとって車で数時間もかかる県病院への受診は経済的に困難である。彼らが受診することのできる医療機関はせいぜい Health Post が妥当なところである。

我々のミッションは 2007 年からラオス中部のカムワン県を対象とし、僻地の住民に対する巡回診療を 3 年間行ってきた。カムワン県には 9 つの郡が存在するため全ての郡を巡回するにはまだ 5-6 年を要する。今回は関西医大の学生 7 人を含めた 13 人の大ミッションとなり、巡回診療における各部門の仕事ぶりが充実していた。対象とした村の総人口は 380 人でそのうち 91.3% にあたる 347 人が受診した。問診および理学的所見上、明らかな異常所見を認めなかった人は 229 人 (66.0%) であった。異常所見を呈した人の中で最も多かった診断は肺炎などの呼吸器疾患で 57 人 (16.4%)、次に慢性胃炎などの消化器疾患 22 人 (6.3%)、筋肉痛や関節痛を主訴とする筋・骨格系疾患 17 人 (4.9%)、蜂窩織炎などの感染症 7 人 (2.0%) の順であった。マラリアの血液厚層標本の蛍光染色検査は後日行う予定だが、受診者のなかにマラリアを強く疑う症例はなかった。また、糞便検査では受診者 347 人中 338 人 (97.5%) から検体の提出があり、そのうち 240 検体 (71.0%) に何らかの虫卵を認めた。内訳はタイ肝吸虫が最多で 213 検体 (88.8%)、次いで鞭虫 44 検体 (13.0%)、鉤虫 31 検体 (9.2%) の順 (重複感染あり) であった。タイ肝吸虫に対するプラジカンテルの投与は後日行われるが、その他の疾患に対する投薬は可能な限りその場で行われた。

診療終了後には多くの村人が集まり、お別れや旅立ちの儀式であるパーシーをしてくれた。その後のラオス踊りも皆ラオス人に交じって楽しんだ。

今後も毎年 3 月に行う予定である。



ラオスにおける巡回診療

東南アジアに位置するラオスは最貧国の一つである。隣国タイとは違い、電気や水道が普及していない村は多い。同国において関西医科大学公衆衛生学教室は、毎年巡回診療を行っている。熱研内科は 2006 年度よりその共同研究に加わっている。巡回診療は毎年 3 月、医療過疎地域で行われ、たいていお寺が巡回診療の場所となる。1 日約 100 人程度の患者が受診し、身長、体重、血圧測定のとマラリアの血液検査や便の虫卵検査が行われる。その後診察があり必要なら投薬がなされる。同様なことを 2～3 日間行い、その後データ解析や住民への結果のフィードバックを行う。今後も同様な活動を行い、同国の医療過疎地域における疾病構造を把握し診療に携わっていく予定である。



カムワン県ボラバ郡での巡回診療活動、
2008年3月

巡回診療の会場となる村のお寺、
2008年3月

